

[04_05]九州大学大型計算機センター広報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1467989>

出版情報：九州大学大型計算機センター広報. 4 (5), 1971-10-15. 九州大学大型計算機センター
バージョン：
権利関係：

随 想

九州大学大型計算機センター業務委員会
委員長 加 納 省 吾

最近は、情報産業とか情報化社会などと言う言葉がよく使われるようになったが、これは全く電子計算機の発達によるものであろう。科学計算とデータ処理から出発した電子計算機も、いまでは自動制御、ハターン認識、グラフィック・ディスプレイ等、ひろく情報の処理を担うようになってきた。そのうちに人間のもっている情報処理機能は、ほとんど電子計算機が代行するようになるのではないかとさえ思われる。これからの発展がどんな形をとるかは全然見当もつかないけれども、現在各地にある大学の大型計算機センターが、これからの情報処理のあり方について大きな役割をもっているような気がする。

人間のもっている創造能力を電子計算機ににあたえることができるか何うかは、むづかしい問題であるが、電子計算機による作曲とかデザイン等はやはり情報の処理であり、人間による創造とは違うと思う。人間の創造活動が一体どんなものなのかと云う疑問を解くことは、このような人間の機能を一つづつ機械に代行させていったとき、あとに何が残るかと云うことになりそうである。もっともその過程で後に残るものも少しずつ変ってゆくであろうから、いま考えているものとは違うものになるかもしれない。

一方、どんな生物でも、生存のため必要な適応性を得るための学習能力をもっている。その程度は生物の種類によって差があるが、人間では特に重要な能力である。普通は学習と云うと、つめこみ主義の模倣学習のようなものを思い出すが、本当は創造性を豊かにするものが望まれているのであるから、創造は学習の一つの表われではないかと思う。このように見ると、人間のもつ情報処理能力も学習の一つの表われであり、将来開発される電子計算機もこの意味で、人間の学習機能を助長するものであってほしい。それでこそ人間の情報処理機能を十分に代行することができるであろう。

人間の五感に相当するいくつかの専用計算機と、それらを統合して判断を行なう制御用計算機とからなる一群の電子計算機システムを、人間の頭脳の一つのモデルと考えると、将来の電子計算機のもつ役割もおぼろげながら分るような気がしてくる。

以上は私個人のつまらぬしろうと考えであるが、こんなことを考えていると、電子計算機のこれからの発展とそれによる世の中の変化などがますます興味深く期待される。

1971年 9月24日